# ロヒンギャ問題の解決策

01. JUN. 15

小島正憲

1. ロヒンギャ問題の背景に、「**民主化**」あり
2. ロヒンギャ問題に、「**イスラム過激派介入の怖れ**」あり
3. 私の**解決策**

《添付資料》

A. バングラデシュから見たロヒンギャ族問題　27. JUL. 12　**→ロヒンギャの歴史を詳述**
B. ミャンマー ： 情報検証 2012年 8月　16. AUG. 12　**→チャオピュー周辺事情詳述**
C. バングラデシュ短信 ： ラム市でのイスラム教徒の仏教徒襲撃の真相　26. OCT. 12
D. アルカイダ、ジャマティ・イスラミ、969運動　22. SEP. 14

## 1. ロヒンギャ問題の背景に「民主化」あり

最近、俄にミャンマーの少数民族ロヒンギャの難民が増えている背景には、「**民主化がある**」と、私は見ている。

ミャンマーのラカイン州に住みついているロヒンギャについては、日英両国に大きな責任がある。なぜなら、「19世紀後半、英国がミャンマーとバングラデシュの両国に侵入し、その植民地政策の一環として、ラカイン州の農地がチッタゴンからのベンガル系イスラム教徒の労働移民にあてがわれた。この頃から、国境周辺地帯に、仏教徒対イスラム教徒という対立構造ができあがり、英国はそれを統治のためにうまく利用した。さらに1879年にはバングラシュに深刻な飢餓が発生し、ベンガル人の多くがビルマへ移住した。1942年、日本軍の進駐によって英国がこの地から撤退した。日本軍は仏教徒を武装させ、英国軍が武装させたイスラム教徒と戦わせた。失地回復を合い言葉に仏教徒のアラカン族は、イスラム教徒のロヒンギャ族の迫害と追放を開始した。この経過から見れば、ラカイン州の民族対立の遠因は、英国と日本が作ったと言っても過言ではない」(添付資料Ａより)。

すでに3年前、バングラデシュの知識人:アシュファクール・ラーマン氏は、「我々は、これがスー・チー氏を沈黙させるための軍事政権による策略であると見ています。仏教徒の支持を失う可能性があるので、彼女はあからさまにロヒンギャ族をサポートすることはできません。しかし、同時に彼女は、ロヒンギャ族の人権侵害を無視することもできません。これは国際社会からの非難をもたらすでしょう。彼女は、軍事政権との間で、早急にこの問題の解決策を見つけなくてはなりません」と発言している。たしかにこの見方は当たっている。

現在、これだけ国際問題になっているロヒンギャ密航問題について、スー・チー氏は沈黙を守っている。今年秋に国政選挙を控え、スー・チー氏も仏教徒の反イスラム教感情を無視できないようであり、地元メディアに意見を問われても、「政府が取り組むべき問題だ。政府に聞いた方がいい」と返答するのみである。国民民主連盟(NLD)も公式見解を出していない。国民の間では、ロヒンギャがバングラデシュからの不法移民との見方が根強く、大量流入すればミャンマーで約9割を占める仏教徒の社会への脅威につながりかねないとの思いもあり、差別につながっている。人権団体や西部ラカイン州の避難民キャンプで暮らすロヒンギャからは失望の声が広がる。キャンプの住民リーダーの男性は「スー・チー氏がノーベル平和賞を受賞したのは過去の話。今は政治家だ」と語っているほどである。

ロヒンギャ問題が、近年になって急浮上しているのは、テイン・セイン大統領の、「スー・チー氏の国内外での名声を貶める」ための策略である可能性が高い。ロヒンギャ問題だけでなく、この数年の民主化の過程で、ミャンマー各地において、少数民族や多くの人民が、民族紛争、公害反対騒動、土地騒動など、さまざまな要求を掲げて立ち上がってきた。軍政に圧殺されていた人民が、民主化とともに、声を上げ始めたのである。ところが、それらの人民を最大限に擁護しなければならないはずのスー・チー氏は、人民に対して「我慢や忍耐」を要求することが多い。最近では、このスー・チー氏の態度に、少数民族や人民の間に、スー・チー氏への失望感が広がりつつある。軍政側の「スー・チー潰し」の策略は「功を奏しつつある」と見てよいのではないか。

## 2. ロヒンギャ問題に、「イスラム過激派介入の怖れ」あり

ロヒンギャ問題は、隣国のバングラデシュにとっても、重大事である。バングラデシュ最南東部のテケナフは、ミャンマーとナフ川で隔てられているだけで、乾季ならば川を渡って越境できる。実際、1978年以降、そこに約20万人のロヒンギャが逃げてきたという。国連の援助による施設もあるが、そこに収容されているのは、1万人前後である。バングラデシュ国内には、「同じイスラム教徒であるロヒンギャに救済の手を差しのべるべきである」という主張もあるが、現地住民の間からは、「これ以上なだれ込まれたら、われわれの生活が成り立たない」と悲痛な声が上がっている。（詳しくは、《C. バングラデシュ短信 ： ラム市でのイスラム教徒の仏教徒襲撃の真相》を参照）。この数年、これらの状況を利用して、野党のBNPやジャマティ・イスラミ（バングラデシュのイスラム過激派）が、ハシナ首相のロヒンギャ対応に揺さぶりをかけてきている。ハシナ首相は、「イスラム教徒は救わなければならない。しかし大量になだれ込まれたら経済が疲弊する」というジレンマの中で苦慮してきている。ロヒンギャ漂流難民問題が浮上して、最近、国際的にもバングラデシュの責任を問う声が上がってきている。その結果、5／27、ハシナ首相は大胆なロヒンギャ対策＝ロヒンギャの離島隔離政策を発表した。

5／27、バングラデシュ政府高官は、隣国ミャンマーから避難してきたイスラム系少数民族ロヒンギャの難民キャンプを、ベンガル湾の離島に強制移転する意向を表明した。難民キャンプの存在が観光業に悪影響を及ぼすとの懸念が移転計画の背景にあるという。バングラデシュ災害対策省管轄下にあるミャンマー難民団体の責任者アミト・クマール・バウル氏は、ハシナ首相の指示の下、最南東部コックスバザールにある2カ所の難民キャンプを約100キロ離れたハティヤ島に移す計画を進めていると明らかにした。既に島内の新たな難民キャンプ候補地の選定も終わったという。ミャンマー国境に近いコックスバザールはビーチリゾートとして有名で、国内外から多くの観光客が訪れる。現在は2カ所の難民キャンプに計約3万2000人が収容されているが、バングラ国内には正式な手続きを経ずに避難してきたロヒンギャ難民が20万～50万人いるとされる。 ロヒンギャ難民の1人は、「離島に移転すれば難民の生活はより厳しくなる。バングラデシュ政府と国際機関は難民問題解決に協力してほしい」と訴えている。

バングラデシュの最南東部のラム市周辺には、多くの仏教徒が居住している。2012年、この仏教徒たちが、ジャマティ・イスラミ（イスラム教徒過激派）と目される集団によって襲撃された。これはミャンマーにおける仏教徒過激派のイスラム教徒迫害に対抗して起きたものと見ることもできる（C. バングラデシュ短信 ： ラム市でのイスラム教徒の仏教徒襲撃の真相 26. OCT. 12を参照）。同時に、総選挙を前に大きな騒動を起こし、ハシナ首相を不利な立場に追い込もうとした野党の画策と考えることができる。もっとも警戒すべきことは、中東におけるISの急速な勢力拡大を、自組織の危機と捉えたアルカイダが、ジャマティ・イスラミと呼応して、ロヒンギャ問題に触手を伸ばしている可能性が高いということである。しかもアルカイダを含む国際的なイスラム過激派が、ミャンマーのロヒンギャの窮状に目をつけ、資金援助を含む大きな一手を打ってくる可能性がある。結果としてロヒンギャ離島隔離政策は、イスラム過激派離島温存政策になってしまう可能性もある。また。さらにロヒンギャから、ISなどへの参加者が続出する可能性も否定できない。

## 3. 私の解決策

2012年にラカイン州で起きたロヒンギャ襲撃事件後、ロヒンギャは政府の提供するキャンプ地などで、細々と暮らしていたが、中には国外へ脱出を試みるものも少なくなかった。その多くは、タイやマレーシアを目指したが、当然のことながら、ロヒンギャには国籍もないため、それらの国で就労は認められなかった。ことにタイではクーデターで軍事政権に変わってから、不法就労者の取り締まりが強化された。そこに目をつけたタイやマレーシアの悪徳商人が、タイの水産業者などにロヒンギャを斡旋し、ぼろ儲けをする構図ができあがった。もちろん不法就労のため、ロヒンギャは奴隷並みにしか扱われなかった。1年ほど前から、その悲惨な状況がメディアで報道されるようになり、この手の悪逆非道な商売はなりを潜めることになった。しかしロヒンギャは出稼ぎ先を失っても、とにかく新天地を目指して次々とミャンマーを脱出しようし、人身売買組織に身を委ね、船に乗り込んだ。タイやマレーシア、インドネシアなどの政府が、それらの船の着岸を拒否したため、ロヒンギャの多くは洋上を漂う難民と化した。一部はタイに上陸し、陸路でマレーシアを目指したが、飢えや病気のため、多くがそこで命を落とした。最近、タイとマレーシアの国境付近の山中で、彼らの埋葬跡が数多く発見されている。

これらの事実がメディアで報じられるに及んで、周辺各国に対して国際世論の非難の声が上がるようになった。このような中、5／29、バンコクで周辺各国による特別会合が、タイのよびかけで行われた。この会合には、密航先となっているタイ、マレーシア、インドネシアのほか、難民を排出しているとされるミャンマーやバングラデシュなど17か国に加え、オブザーバーとして日本、米国、スイスの3か国、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、国際移住機関が参加した。しかし人命保護の観点から具体的な解決策の実施や難民の受け入れ先、責任の追及など根本的な議論には踏み込めず、有効な手立てを打ち出せないまま会議は終わった。

私は、今、ただちに漂流難民を周辺各国が一時的に上陸させ、健康を回復させることが、人命保護の観点からの急

務である考える。周辺各国はそれらの難民がその地に居着いてしまうことを怖れているのだから、UNHCR が暫定国籍のようなものを発行し、ただちに労働力を必要としている国々に送り出し、正式就労させればよいと考える。このような方策は対症療法でしかないが、とにかく漂流難民を救出し、悪徳人身売買商人の暗躍を封じ込めなければならない。バングラデシュからはたくさんの労働者が中東へ出稼ぎに行って、その地で多くの外貨を稼いでいる。それがバングラデシュの大きな財政収入になっているほどである。ミャンマーからも、タイヤマレーシアに出稼ぎに行っている人は多い。UNHCR は、ミャンマーのラカイン州に残されたロヒンギャやバングラデシュの最南東部に住んでいるロヒンギャにも、暫定国籍を発行して、正式手続きを経て出稼ぎに行くことができる道を開くべきである。

次ぎに抜本的な解決策としては、ミャンマーのラカイン州およびバングラデシュの最南東部の地域に、産業を興し、ロヒンギャを雇用し、彼らに安定収入を保証し、その地での安住を保証することが、最善策だと考える。5／29にバンコクで開催された関係国会議でも、**ロヒンギャが密航する原因は経済的困窮にあるとの認識を基に、ロヒンギャが多く住む地域で雇用創出などに取り組むことで、ミャンマーを含む各国が合意した**と報じられている。しかしミャンマー・バングラデシュ両国政府が、なんらかの理由で、それらの地での産業振興を歓迎しないのであれば、国際世論は一致団結してそれを弾劾しなければならない。また日英両国には、このロヒンギャ問題に積極的に関与し解決しなければならない歴史的責務があるのだから、その場合は旗振り役を買って出なければならない。

幸いなことに、ミャンマー政府は、ラカイン州のチャオピューで工業団地の開発計画を立てている。もっとも、チャオピューは中国へのパイプラインの玄関口であり、この工業団地にも中国政府の影響が色濃い。日本政府は今、ティラワ工業団地の開発に全力をあげているが、次ぎにダウェイ工業団地開発に興味を示しているようである。私はダウェイを断念して、チャオピュー工業団地開発にその力を注ぐべきであると考える。ここにはロヒンギャ70万人の労働力が期待できるし、何よりもこれによりラカイン州の経済を活性化することが可能だからである。もしこのチャオピューに工業団地ができれば、私はそこに縫製工場を建て、多くのロヒンギャを雇用するつもりである。現在、ミャンマーで稼働中のわが社の工場はオポ市にあり、チャオピューの工場を支援するには絶好の場所にある。

2年前、その地に工場を建てるため、オポ市の市庁舎を訪ね、私は市長と親しく話し合った。オポ市周辺には、イスラム教徒も結構住んでおり、仏教徒住民との諍いがあることを聞いていたので、そのとき私は市長に、「私は工場敷地（10万㎡）内に、仏教徒用のパゴダとイスラム教徒用のモスクを建て、工場内の宗教融和を図りたい」と提案した。すると市長は目を丸くして、「モスクを建てるなんてとんでもない。建てるには中央政府の許可が必要です。そんなことはしないでください」と言った。やはりロヒンギャを含むイスラム教徒は、軍政にとって厄介者なのだろう。その厄介者をあえて雇用し、宗教融和を図ろうと試みる私の努力は、軍政にとって、是なのか非なのか、今のところ私には見当がつかない。

なお、チャオピューには日本政府の資金で気象台が建設される予定であり、この地が日本政府の視野からまったく外れているわけではない。またこの地に、日本企業が進出すれば、それは中国への絶好の牽制策にもなる。

バングラデシュ政府は、5／27、ロヒンギャの離島隔離政策を発表した。すでに隔離先は、現在の難民キャンプから100kmほど離れたハティヤ島に決まっており、島内の新たな難民キャンプ候補地の選定も終わったという。今、私にはこの情報の真偽を判断する術がないし、この島の位置や面積、自然災害の有無、島内事情などもまったくわからず、果たしてロヒンギャが生存可能なのかどうかもわからない。おそらくそこには産業はまったくないだろうから、半農半漁の自給自足となるのだろう。電力などのインフラが整っているとはとても思えないし、当たり前の話だが、離島だからそこにはトラックではなく船が必要となる。これはこの離島で、産業を興そうとする場合の決定的なマイナス要因である。残念ながら、さすがの私も自前で船を調達し、この離島に縫製工場を建てるという冒険をする気にはならない。

それでもわが社は、ダッカに基幹工場を確立しており、そこにはイスラム教徒の管理者・技術者がたくさん育っている。またチッタゴンにも親しい仲間がいる。したがってわが社はバングラデシュの最南東部に縫製工場を稼働させるには、もっとも有利な位置にいる。そこが離島でなければ、縫製工場を建て、ロヒンギャを雇用し、その地の経済を活性化することはできない話ではない。運命の女神が私に微笑みかけ、善意の支援者が軍資金を提供してくれれば、私はバングラデシュ最南東部に縫製工場を建てることにやぶさかではない。またロヒンギャ問題の解決のために、善意の支援者が私に船を与え、一肌脱げということならば、私は人生最期の一戦をハティヤ島で戦う覚悟である。

---

《添付資料》

## A. バングラデシュから見たロヒンギャ族問題

27. JUL. 12

小島正憲

ミャンマーのラカイン州で、イスラム教系と仏教系の民族対立が激化してから、約1か月半となる。

一般に、ロヒンギャ族問題は、ミャンマー側からの報道が多い。今回はまず、ロヒンギャ族問題を概説し、次にバングラ

デシュの一知識人の発言を紹介する。

## 1. ロヒンギャ族をめぐる歴史と現状

この騒動は、5／28、州中部の村でロヒンギャ族と見られるイスラム教徒3人が、アラカン族の仏教徒女性に暴行し殺害したことに端を発したとされている。6／03、州内南部でアラカン族がロヒンギャ族の乗ったバスを襲撃、10人を殺害。その後、対立は激化し、6／24時点で、死者78人、負傷者87人、仏教の僧院やイスラム教のモスクなど、3000棟以上が襲撃や放火などで破壊されたという。ラカイン州では、現在に至るも、解決の兆しは見えず、両民族合わせて10万人ほどが、避難生活を送っているという。なお、ロヒンギャ族はラカイン州に約80万人、バングラデシュに約30万人が暮らしていると言われている。

バングラデシュとの国境沿いに位置するラカイン州は、きわめて複雑な歴史的背景を持っている。ミャンマーの先住民族であるアラカン族は、15世紀、ミャンマーとバングラデシュの国境地域にアラカン王国を築き支配していた。現在のバングラデシュ南東部のコックスバザールからチッタゴンまでが、そのアラカン王国の支配地域であった。そのころ現在のバングラデシュ南東部に住んでいたイスラム教徒のロヒンギャ族は、アラカン王国に従者や傭兵として雇われたり、また商人として頻繁に往来し、国境周辺に定住するようになった。また逆にミャンマーの仏教徒も、チッタゴン周辺に進出した。つまり当時から1966年にナフ川が正式に国境と決定されるまで、ミャンマーとバングラデシュの国境はあいまいであり、バングラデシュ人も、アラカン族も、ロヒンギャ族も、自由に往来し、両国にまたがって住んでいたのである。

19世紀後半、英国がミャンマーとバングラデシュの両国に侵入し、その植民地政策の一環として、ラカイン州の農地がチッタゴンからのベンガル系イスラム教徒の労働移民にあてがわれた。この頃から、国境周辺地帯に、仏教徒対イスラム教徒という対立構造ができあがり、英国はそれを統治のためにうまく利用した。さらに1879年にはバングラシュに深刻な飢餓が発生し、ベンガル人の多くがビルマへ移住した。1942年、日本軍の進駐によって英国がこの地から撤退した。日本軍は仏教徒を武装させ、英国軍が武装させたイスラム教徒と戦わせた。失地回復を合い言葉に仏教徒のアラカン族は、イスラム教徒のロヒンギャ族の迫害と追放を開始した。この経過から見れば、ラカイン州の民族対立の遠因は、英国と日本が作ったと言っても過言ではない。

日本が敗退すると、ラカイン州に英国軍が再侵攻し、ベンガル系移民の勢いが復活した。そのときロヒンギャ族を含むイスラム系の人たちは、東パキスタンへの帰属を求めた。しかしそれが拒絶されたためミャンマーに残り、民族独立の機会を探った。それはミャンマーのウー・ヌー政権によって一時的に容認されたが、1982年、少数民族弾圧を強行したネ・ウィン政権下の「市民権法」で、ロヒンギャ族は正式に非国民であると規定され、国籍が剥奪された。このとき、約30万人のロヒンギャ族がバングラデシュに逃れた。さらに1988年、アウン・サン・スー・チー女史らの民主化運動をロヒンギャ族が支持したため、軍事政権はラカイン州に7～8万の軍隊を投入し、ロヒンギャ族を弾圧した。ロヒンギャ族は家財や食料、家畜を掠奪され、反抗すれば暴行を受け、場合によっては殺害されることもあった。それに耐えきれず、多くのロヒンギャ族が1991～92、96年～97年の2度にわたって、国境を越えてバングラデシュに逃げ込んだ。

当時、世界最貧国の一つであるバングラデシュにその難民を受け入れる余裕はなかったが、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）や国際 NGO などが、難民キャンプなどを設営し、ひとまずその救済に当たった。しかしながらバングラデシュにとって、ロヒンギャ族難民の存在は、長期化するにつれて次第に迷惑な存在となっていった。その上、難民流入の結果、物価高、食糧不足、エネルギー不足なども起こり、また難民にだけ各種の組織から援助があり、逆に地元住民にはなんの恩恵もないため、地元住民との摩擦が大きくなり、困ったバングラデシュ政府は、2004年、ロヒンギャ族を不法移民としてミャンマーへの送還を実施するようになった。行き場を失ったロヒンギャ族の一部は、小船でタイやマレーシアを目指した。現在では、サウジアラビア・インド・パキスタン・マレーシアなどに、約100万人が散らばっているという。最近、タイがロヒンギャ族を難民として認めずミャンマーに強制送還し、大きな問題となった。

現在、ミャンマーは民主化の途上であり、民主化活動家たちもカレン・カチン・モン・シャンなどの少数民族問題解決のために、奔走している。しかしながら彼らは同じ仏教徒の結束を図るため、イスラム教徒であるロヒンギャ族よりも、むしろアラカン族寄りの立場を取っている。また国民の多くもロヒンギャ族に悪い感情を抱いている。したがってロヒンギャ族問題に関するスー・チー女史の発言も、微妙なものとなってきている。少数民族としてタイ国境に住むカレン族やモン族と比べると、ロヒンギャ族問題は宗教問題がからみ、なおかつ隣国バングラデシュ政府に、ロヒンギャ族難民を受け入れだけの経済的余力が乏しいため、より複雑であると言える。

## 2. バングラデシュ知識人の発言。

**ロヒンギャ族問題について　　アシュファクール・ラーマン**

ミャンマーの政治体体制の古い傷が、先週また口を開けました。ミャンマー西部、バングラデシュの隣にあるラカイン州で、バスに乗っていたイスラム教徒のグループが、仏教徒の暴徒によって殺されたのです。報道によると、殺人者

は、通常、ミャンマーの治安部隊が行うような残酷な手口であったようです。事件は数日前、3人のイスラム教徒の男たちが、仏教徒の少女をレイプし殺人したことへの復讐だと伝えられました。バスが放火される前に、10人のイスラム教徒が撲殺されました。そのときすでにレイプ殺人をした犯人は、逮捕され刑務所に投獄されていましたが、殺人者たちにとってはそのようなことは構わなかったのです.

殺害に対するミャンマー内の反応は、さらに驚くべきものでした。インターネットで配給されたコメントには「クロンボ(kala)を殺すのはいいものだ」とありました。ここで使われている「カラ(kala)」は、ロヒンギャ族としてミャンマーで知られている南アジア系の黒い肌のイスラム教徒を軽蔑的に指しています。それは、イスラム教徒に向かって彼らの一般的な恨みを反映しています。

それにしてもロヒンギャ族とは誰のことなのでしょうか。なぜ彼らはミャンマー社会から排除され続けているのでしょうか。ミャンマーの辺境地域は、多くの民族が住んでいます。このようなグループのほとんどは、その国の市民として認められています。しかし、例外があります。注目すべきものの一つは、ロヒンギャ族であります。彼らは、バングラデシュとミャンマーの国境沿いに住んでいます。これらの人々は北ラカイン(アラカンも呼ばれる)で深い歴史的ルーツを持っています。その名はアラカンの以前の名だったという「ロハンス」から来ています。彼らはベンガル、ペルシャ、モグルス、タークス・パタンズの民族の混血です。彼らの言語はウルドゥー語、ヒンディー語とアラビア語の単語の混ざったベンガル語(バングラデシュのチッタゴンなどで話されています)であります。峰の高いアラカン山脈の山々は、その地域だけをミヤンマーのほかの場所から遮断しています。したがって、何世紀にもわたって、彼らは本土から分離され住んでいます。彼らが最初にそこに定住したのは7世紀であります。

確かに1784年まで、アラカンは、独立したイスラム教徒の王国でした。その年にバダワファヤと呼ばれる仏教のビルマ王によって植民地化されました。その時から、二つの異なるコミュニティが、この22000平方マイルの領土に居住し始めました。イスラム教徒のロヒンギャと仏教マグスでした。英国が1824年に侵入し、ビルマの全てを支配し始めたとき、アラカンの人口は1万人で、そのうち30%がイスラム教徒であったと記録されています。イスラム教徒のこの割合は、数年の間に増加しました。イギリス占領時代、ビルマにはさまざまな人種が住んでいたと記録されています。135の異なる民族が識別できるとも記録されています。

ビルマは1948年に英国からの独立後、多くのロヒンギャ族がビルマのポスト植民地議会に選出されました。彼らは1948年、市民権法の下で、国の真正市民権を得たのでした。1961から65年まで、ビルマ語放送サービスにもロヒンギャ言語プログラムがあったこともよく知られています。しかし、すべてが1962年に軍事クーデターで民主的な政府を覆したネ・ウィン将軍の勝利の後、一変しました。ネ・ウィンは、彼は前の与党はロヒンギャ族の票を得るためにロヒンギャ族を単一民族として認識したのだと言い張り、ロヒンギャ族のビルマでの市民権を奪い、彼らを無国籍にしてしまいました。彼らは近隣のバングラデシュ(当時は東パキスタン)からの移民であると考えられたのでした。

軍はその後、強制労働を彼らに強制し、財産を没収し、必要以上の殺害を行いました。彼らは、ロヒンギャ族の教育、貿易へのアクセスを妨げ、ロヒンギャ族の雇用も拒否し、行動を制限しました。結婚し家族を形成する権利でさえ、その許可のために当局から高い賄賂で購入しなければならないという対象になりました。世界は、これらの人々に対して「じわじわとした大虐殺」が行われているのを見ていました。迫害に直面したロヒンギャ族の多くは、自分たちの土地を出て、バングラデシュへボートで脱出しました。1978年、続いて1991年に多くの流出が起こりました。

1992年に、国連総会はビルマ軍の手によるロヒンギャ族の弾圧をみとめて、144／47議決を通過させました。約20万人のロヒンギャ族が、それまでにバングラデシュに逃げこんでいました。しかし、ミャンマーの軍事政権は故郷にそれらを戻すために何も処置をとりませんでした。 UNCHR に登録されている約28，000人がバングラデシュのコックスバザール地区での二つの大きなキャンプに収容され、残りの人たちはバングラデシュ国内の各地にまたは他の国に散らばっています。ミャンマー(当時ビルマ)政府は、バングラデシュ政府、及び国際社会の嘆願に応答しませんでした。

現在も、ミャンマーの軍隊は、国境を越えてロヒンギャ族を襲う可能性があります。今でも我々は小型ボートに乗り、バングラデシュの安全な避難所に到達するために湾を渡って来る人々を見ることができます。しかしバングラデシュ政府は、ロヒンギャ族のバングラデシュへの難民受け入れを承認していません。わが国の国境警備兵と沿岸警備はこれらに警告を発し、その監督の下でこれらの小さなグループが一時的に保護し、救急手当てをした後、送還しています。

現在、我が政府も深刻な道徳的、倫理的な問題に直面しています。なぜなら我々は、1971年、当時のパキスタンの軍事政権によって拷問を受けたときに、我々は近隣のインドの安全な避難所に向かいました。我々は9か月間、そこに保護されていました。その間、私たちの同胞の多くは解放戦争を戦い、独立を勝ち得たのです。その後、私たちは祖国に帰りました。迫害されているロヒンギャ族たちに、帰国するように説得するわが国の政府に、多くの人たちが不快な思いをしています。私たちの外国の友人たちも、バングラデシュ政府にロヒンギャ族の難民を受け入れるように圧力をかけてきました。我々にも大きな課題が投げかけられているのです。

21年間以上、我々はこれらの不運な人々が安心して帰ることができるように、ミャンマー政府にロヒンギャ族問題を解

決するよう要請してきました。しかし、彼らは足を引きずるように問題の解決を遅らせてきました。彼らはできないと知っていても、明らかにバングラデシュがイスラム教徒に避難所を与えていると思っているのです。しかし、ミャンマーの中の政治的シナリオが、ここ数年間で劇的に変化しています。現在、テイン・セイン大統領のリーダーシップの下、ミャンマーは民主主義体制に向かって動いています。ノーベル賞受賞者アウン・サン・スー・チーは自宅軟禁から解放され、彼女は彼女の党とともに議会に戻ってきました。この新しい神の摂理にロヒンギャ族は、いくつかの肯定的変化を見ていることでしょう。

しかし、ロヒンギャ族に対する暴動のタイミングを非常に心配しています。我々は、これがスー・チーを沈黙させるための軍事政権による策略であると見ています。仏教徒の支持を失う可能性があるので、彼女はあからさまにロヒンギャ族をサポートすることはできません。しかし、同時に彼女は、ロヒンギャ族の人権侵害を無視することもできません。これは国際社会からの非難をもたらすでしょう。彼女は、軍事政権との間で、早急にこの問題の解決策を見つけなくてはなりません。ミャンマー政府の可能な方法として、1982年のビルマ国籍法を廃止または改正することがあげられます。つまり、ロヒンギャ族の市民権を回復させることです。彼らは市民として認識されたら、その後、基本的な権利を持つことができるのです。

来月、ミャンマーの大統領はダッカを訪問すると予想されています。訪問が行われる場合、我々は今、ロヒンギャ族問題を解決させるために、ミャンマーに関する国際的な圧力を構築する必要があります。我々は、平和的な境界を持つことは両国の相互利益になることを主張しなければなりません。ミャンマーの軍事政権が化膿した傷をそのまま政治の中に閉じ込めておけば、世界はおろかこの地域で民主国家に仲間入りすることさえもできないことを彼らに警告しなければなりません。彼らが民主的な国家であると表明する前に、現在、国境を越えて紛争中の宗教の問題をまず解決する必要があることを自覚させるべきです。

## B. ミャンマー ： 情報検証 2012年 8月

16. AUG. 12

小島正憲

### 2. チャオピュー工業開発区の現状

昨今のミャンマーの経済開発について、日本では一般に、ダウェイはタイが、ティラワは日本が、チャオピューは中国が、シットウェイはインドがそれぞれ強力に後押ししていると言われている。ダウェイの開発が道路インフラ以外についてまったく停止状態であることは、すでに私が現地調査し報告ずみである。しかし最近では、ダウェイについて、タイの民間シンクタンクが、「ダウェイ開発は、タイがアジアのデトロイトになる数少ないチャンス」だと訴えており、また日本がタイと協力してダウェイ開発に臨むという情報も飛び交っている。反面、ミャンマー現地巨大企業の MAX グループが、正式にこのプロジェクトから撤退したという報道もある。つまりビジネスチャンスを掴もうとする企業家たちの発信する憶測や希望的観測を、メディアが増幅する結果、それらは現場とはかなりかけ離れたものになってしまっているのである。

今回私は、ミャンマー西部のヤカイン州チャオピューに行き、中国が強力に後押ししているという各種のプロジェクトの現場を、この目で確かめてきた。これまた巷に流れている情報とは、かなり違ったものであった。

#### ①天然ガスプロジェクト

チャオピューでは、中国が天然ガスプロジェクトを強力に押し進めているという情報だったので、まずその地点に行ってみた。しかしそこには古びたパイプが山積みにされており、海岸に向かってテストパイプラインが伸びているだけで、その他にはなにもなかった。その近くに、100人前後の中国人スタッフのための事務所と宿舎があったが、開発工事現場とおぼしき場所はまったくなかった。事務所の前で写真を撮っていたら、ミャンマー人の門衛が出てきて、「写真撮影はダメだ」というので、早々にその場を退散した。

次に、地元の人から、「韓国の天然ガスプロジェクトの工事現場がある」との情報を得たので、そこに行ってみた。少し高台になったところに、その現場を俯瞰できる場所がしつらえてあった。もちろん写真撮影など自由に行うことができた。そこでは、現代グループ傘下の企業の重機や車輌が、雨季で泥沼化した現場を活発に走り回り、いろいろな施設が建てられていた。ちょうどそこに居た地元のミャンマー人が、「韓国企業はすべてオープンにして、地元住民の反感を買わないようにしているのだ。またこの近くに現代グループが港を作り、このプロジェクトのための資材はそこで陸揚げされている。多分、あと1年ほどでこのプロジェクトは完成するだろう」と、話してくれた。さっそくその港に行ってみたところ、そこは港湾や埠頭というよりも、桟橋だけの港であり、安上がりの施設であった。それでも資材の陸揚げだけならば十分に用を足すことができるものであり、実際に鉄骨がたくさん積み上げられていた。私はそこにスピーディーに事業を展開する韓国企業の強さの真髄を見たような気がした。

さらにその近くに、インドとミャンマー企業の合弁の天然ガスプロジェクトがあるというので、そこにも行ってみた。そこではターバンを巻いたインド人たちが、長靴を履いて泥んこ道を歩き回り、陣頭指揮をしていた。残念ながら現場は立ち入り禁止になっており、見ることはできなかった。ちなみにチャオピューで私が泊まったホテルは、ちょうどインド人スタッフの宿舎になっており、夕食時におもしろい場面に立ち会うことができた。夕食後、インド人スタッフ20人ほどが、食堂に居残り、大きな図面をテーブルに広げ、真剣に会議を始めたのである。私が感心してそれを見ていると、食堂のウェイターが、「インド人たちは、毎日夕食後に、1時間ほど、このような会議を行っています」と、教えてくれた。

《中国の天然ガステストパイプライン》

《韓国の天然ガスプロジェクト》

《韓国のプロジェクト用桟橋》

**②工業開発区**

ミャンマー政府が中国の協力を得て、チャオピューに工業特区を開発中であるとの情報を得ていたので、その場所に行ってみたが、そこには看板もなく、農地があるだけでまったく手付かずの場所であった。案内してくれたミャンマー人に、間違いではないのかとなんども問い返したが、そこだという。私は首をかしげながら、その場をあとにした。

**③日本が支援する測候所**

私が不満な顔をしていると、ミャンマー人の案内人が、私のご機嫌を伺うように、「このすぐ近くに測候所があり、それを日本政府が資金援助して建て替えることになっている」というので、そこに案内してもらった。たしかにベンガル湾に面した、小高い岡の上に、コンクリート造りの測候所が建っていた。管理人の夫婦がいたので聞いてみると、「先週まで、日本から技術者が来て、いろいろな調査をしていた」という。現在の建物の隣に、新しく測候所を建て、そこにレーダー装置などを持ち込み、ベンガル湾の気象条件を監視していくそうである。

**④石油パイプラインプロジェクト**

私は大体これで、チャオピューの経済開発の現況を掴み終わったと思い、チャオピューの街中の視察に向かった。それでもどこか心残りがあったので、街の中で、「中国の開発プロジェクトが、どこかで行われていないか」と、聞いて回った。するとあるミャンマー人が、「この島の反対の方に、中国人がたくさん働いている大きなプロジェクトがある」と教えてくれた。さっそくそこに案内してもらおうと頼んだら、「そこには道路がないから車では行けない。中国人たちは船で往来している」という。「それでは私も船で行きたい」と言うと、「船は明日の朝9時にしか出ない。片道1時間半で、海が荒れると船が出せない。とにかく明日の朝になってみないとわからない」との答えが返ってきた。私は、「せっかくチャオピューまで来て、中国の一大プロジェクトの現場を見ないで帰ることはできない」と思い、翌日の飛行機をキャンセルして、その場所に

船で行くことにした。

翌朝、私は船着き場に行って、船を待った。案内のミャンマー人が、「今日は中国人客がないので、船はあなただけなので、割高になるがよいか」と聞いてきたので、仕方なく OK と答えた。待つこと20分、目の前に木造のオンボロ船が着いた。それは私が小さいときに乗ったことがあるポンポン船だった。これで海を1時間半も渡っていくのかと思うと、いささか腰が引けたが、ライフジャケットを貸してくれたので、それをしっかり身に付け、思い切って船に乗り移った。そこまでは良かったのだが、30分ほど海上を進んでいくうちに、空がにわかに真っ黒になり、大雨が降ってきた。船上には簡単なビニールの屋根しかなかったので、私は全身びしょぬれになってしまった。それでも船が沈没しないかと心配しながら、懸命に中央の柱にしがみついていた。とても大海原の景色を楽しむ余裕はなかった。

それでもその甲斐あって、予定通り1時間半後に、眼前に中国の一大プロジェクトが出現した。海の中に立つ巨大な構造物、その周辺で作業する10隻あまりの鋼鉄船、100メートルを越すであろうと思われる岸壁、陸上に立ち並ぶ貯蔵タンクのような構造物、そして十棟を越すであろう中国人宿舎、それらが私を圧倒した。接岸して、岸壁に上がってみると、そこには「中緬原油管道工程項目馬徳島工程鳥瞰図」という大きな看板が立っていた。ここは中国とミャンマーの合弁の海中油田開発現場であった。ここからパイプラインでマンダレー経由、中国の雲南省へ運ばれるという（上記の地図の赤線）。私は鳥瞰図と照らし合わせながら、陸上や海上を、じっくり見て回った。そしてそのうち私は、このプロジェクトが完成するには、まだ相当の歳月がかかるのではないかと思うようになった。なぜなら鳥瞰図のまだ半分も、出来上がっていなかったからである。しかし中国はこのプロジェクトに大金を投資していることは事実として、確認できた。このプロジェクトは、掛け声だけのダウェイの工業団地とは大きな違いだった。

⑤その他

往復とも大雨に降られたさんざんな船旅で船着き場まで帰った私は、翌日の飛行機でヤンゴンに帰るつもりでいた。ところが飛行機は満席で3日後の分しか空席がなく、飛行機の他で、ヤンゴンまで帰り着く方法は、未舗装でぬかるんだ山中の道路を16時間、ひたすら走る以外に方法がないという。私は決心して車で帰ることにし、夜8時の出発に決め、ひとまずそれまで眠ることにした。ところが夕方6時に起こされ、これから出発だという。チャオピュー市内には、現在、戒厳令が敷かれており、夜の6時から朝の6時までは、外出禁止であるから、できるだけ早く市内を出なければならないとのこと。そこで始めて私は、この街が民族紛争の渦中にあるということを知った。私はロヒンギャ族の問題は、シットウェイを中心にして起きており、この地にはあまり関係がないと思っていたからである。私はこの2日間、この地で民族紛争らしきものはまったく見聞しなかった。それでもこの地に残り、今度はその問題を探ってみたかったが、時間切れで、私は後ろ髪を引かれる思いで、この地をあとにした。

帰路はたしかに悪路だった。それどころかどこで山賊に出会ってもおかしくはないような、山中ばかりであった。山中をひた走っている間で、行き違ったのはトラック3台のみであった。ヤカイン山脈を越えて走ったのだから、それも当然のことだろう。それでも私が驚いたのは、その山中にあった部落にも、電灯がついていたことである。

## C.バングラデシュ短信　：　ラム市でのイスラム教徒の仏教徒襲撃の真相　　26．OCT．12

**※10／21～23、ミャンマーのラカイン州で、仏教徒がイスラム教徒（ロヒンギャ族）を襲撃**　　小島正憲

**（バングラデシュとの国境沿いの州）**

**1．前回のバングラデシュ短信で、下記のような情報を未検証のまま伝えた。**

**ムハマド冒涜映画事件の余波か？バングラデシュ最南部でイスラム教徒が仏教徒を襲撃**

9／30、バングラデシュ最南部、ミャンマー国境近くのコックスバザールのラム郡で、大規模なイスラム教徒の仏教徒への襲撃事件が起きた。イスラム教徒、約2万5千人が仏教寺院、ヒンズー教寺院などを破壊し仏教徒の家に放火した。現地の仏教徒の青年が、フェイスブックにムハマドを冒涜する映像を流したことに、イスラム教徒が怒りを爆発させたことが

原因といわれている。しかしその背景には、隣国ミャンマーで、仏教徒に迫害されているロヒンギャ族の積年の恨み、イスラム過激派とのリンク、BNP（バングラデシュ国民党：現政権との対立党）の策動などがあると推測されている。なおバングラデシュにおける仏教徒は1％ほど。

**2. 10／19・20・21、私は現地を訪ね、その真相を確かめた。以下、ラム市でのイスラム教徒の仏教徒襲撃の真相。**

・バングラデシュの最南部、コックスバザール県の東方15kmにあるラム市には、現在、仏教徒約1万人が居住。

・9／30深夜、ラム市で、イスラム教徒多数が仏教寺院や仏教徒の住居を破壊、放火、略奪。金銀の仏像が多数盗まれ、石像などは鼻が削られ、腕がへし折られ、首と胴が切り離されたりし、完全に破壊された。10／20現在、まだ仏教寺院のほとんどが破壊されたままであった。また仏教徒の住居もまったく再建されておらず、住人の仏教徒たちはテント暮らし。

・仏教徒の話しによると、襲撃の中心になったイスラム教徒は、ラム市に住むイスラム教徒ではなく、チッタゴン周辺からバスで動員されたものだという。それにラム市のイスラム教過激派の若者たちが便乗し、暴れたものと思われる。さらにこの事件は、事前にガンパウダーなどを用意して、突然、大量のイスラム教徒が計画的に襲撃したことなどから見て、かなり以前から計画されていたものと考えられ、偶然に起きたムハマド冒涜事件を利用して行われたものであると、仏教徒たちは語っている。
現地のイスラム教徒も、今回の事件には一様に驚いている。

・事件当日、現地のある寺院では、隣に住むイスラム教徒が僧侶をただちに自分の友人宅に避難させ、助けた。しかし別の現場では、寺院前の住宅が焼き討ちにあったのに、誰も助けに来なかった。警察もまったく動かなかった。

・現在、ラム市には110人ほどの兵士が入って、各寺院の周辺で警戒に当たっている。中国の暴動現場とは違い、そこに緊迫感はなかった。

・現在、現地では、仏教徒とイスラム教徒の融和のために、住民の間で、自主的に「平和会議」が立ち上げられていた。会長は仏教徒代表のウットンジー氏（右の写真の緑のＴシャツ）、副会長はイスラム教徒代表のハルーノ氏（白いシャツ）。

《破壊された仏教徒の住居》

・現地では、仏教寺院や仏教徒の住居の再建のために、多くのボランティア団体から寄付が寄せられている。しかし何百年と続いてきた寺院が完全に破壊、略奪されており、再興するにはかなりの資金と年月がかかりそうである。また仏教徒の住居の再建への寄付が、末端の家庭に行き渡るには、まだ時間がかかりそうであり、途中のピンハネなどで金額が少なくなることもあるようで、末端の家庭では、直接の寄付を望んでいた。

・ヒンズー教寺院の破壊は、確認できず。

・ロヒンギャ族問題は、今回の事件には、全く関係がなかった。ラム市には、ロヒンギャ族はほとんど居住せず。
ロヒンギャ族の難民キャンプはラム市の南方150kmほど（車で3～4時間）のテケナフという場所にあり、そこからラム市に来ることは不可能と思われる。なお、テケナフの難民キャンプには、現在、登録済みのロヒンギャ族が5万人、未

登録が25万人、合計30万人が居住している。さらに難民キャンプ周辺の山中には、密入国したロヒンギャ族20万人ほどが、潜んでいるという。難民キャンプへの出入りは、軍隊によって厳重に規制されており、無許可で進入した場合、射殺もありうる。事前に申請し許可が出れば、警官2名が随伴で、内部の視察が可能ということであった。

難民キャンプ前には、ナフ川が流れており、対岸はミャンマー。川幅が乾季には500mほど、浅くなり、歩いて渡れるという。なお、ミャンマー側からの情報によれば、最近、バングラデシュに密入国したロヒンギャ族は、バングラデシュの兵士に捕捉され、ミャンマーに追い返されており、その数は年間で1000人に上るという。なお、テケナフ周辺は、平地続きのバングラデシュの風景とはまったく異なり、　　《難民キャンプ前の看板》

奇怪な岩山あり、緑に覆われた深山ありというミャンマーに近い風景である。

・一部で今回の襲撃事件は、イスラム教過激派やBNPの策動の結果であるとの推測があるが、現地での聞き込みでは、確証を得ることはできなかった。現地の仏教徒たちは、その疑いを捨てていないようだったが、彼らの口は固く、言質を取ることはできなかった。

・現地の仏教寺院を回っていると、ある寺院の僧侶から、「私は2009年4月に、日本の仏教界の招きで行ったことがある。桜が綺麗でした。今回、このようなことになって悲しいが、私の歩んできた人生の結果でもあり、私は甘んじて受け入れている。もし日本にお帰りになったら、日本の仏教界の皆様にこの窮状を伝えていただきたい」と、頼まれた。

・破壊された仏教徒たちの住居を訪ね、彼らから、いろいろなことを聞き出していたとき、数台のパトカーがけたたましくサイレンをならしながら、私の方に向かってきた。私は通訳の腕を掴んで、すぐに現場を逃げ出し、一軒の家に逃げ込み、デジカメのメモリーを予備のものに入れ替え、メモはくしゃくしゃにしてゴミ箱に捨てた。過去の中国での経験から、条件反射的に私の体がそのように動いたのである。次の瞬間、パトカーは私たちが隠れた家の前を通過していった。続いて何台もの高級車が、目の前を通り過ぎて行った。どうやら政府高官が現場視察に来たようであった。私は安堵し、ゴミ箱からメモを拾い出し、帰路に着いた。翌日の新聞には、チッタゴン政府の役人と警察署長が現地を視察したという記事が載っていた。

### 3. 10／21～23、ミャンマーのラカイン州で、仏教徒がイスラム教徒（ロヒンギャ族）を襲撃　← 未検証

10／21～23、ミャンマーのラカイン州ミンビャーで、仏教徒たちがイスラム教徒（ロヒンギャ族）の住居やモスク（寺院）などを襲撃、放火、破壊した。21日には約20軒、22日には120軒、最終的には400軒に及ぶという。その最中、イスラム教徒3人が死亡。ミャンマーのラカイン州では、6月に仏教徒のイスラム教徒への襲撃が起きてから、両民族間の小競り合いが続いていた。今回の直接の原因については、現在のところ不明。**バングラデシュのラム市でのイスラム教徒の仏教徒襲撃事件との関係についても不明。**テインセイン大統領は、現地に戒厳令を敷いた。

この情報は未検証なので、近日中に追跡調査を行う予定である。

## D. アルカイダ、ジャマティ・イスラミ、969運動

22. SEP. 14

小島正憲

- **インド　：　モディ政権下のヒンドゥー・ナショナリズムに対抗し、アルカイダ登場**
- **バングラデシュ　：　イスラム過激派（ジャマティ・イスラミ）が勢力回復、アルカイダとの合流？**
- **ミャンマー　：　仏教過激派（969運動）が台頭し、イスラム教徒を迫害、アルカイダの進出？**

### 1. アルカイダ、インド支部創設の衝撃

インドのモディ新首相は、若いころヒンドゥー至上主義を掲げる民族奉仕団（RSS）に所属していた。2002年に起きたグジャラート州の暴動では700人以上の死者が出たが、そのとき州政府の当時者であったモディ氏がそれに関与していたのではないかと疑念を持たれている。昨今、インドではヒンドゥー・ナショナリズムの運動が激化しており、モディ政権の誕生がそれに拍車を掛け、インドにおけるイスラム教徒への抑圧が懸念されている。

ヒンドゥー教徒の中には、「ジハードとダルマの対決」と叫ぶものも現れている。RSS が母体となって設立された最過激派組織の世界ヒンドゥー協会（VHP）の幹部は、ラーム寺院再建集会の中で、「ムスリムはジハードの名のもとにラーム寺院を壊し、インド各地で何千ものヒンドゥー寺院を壊した。ジハードはテロ思想である。我々ヒンドゥーはダルマでもってこのジハードに打ち勝たなければならない。このラーム寺院建設はジハード対ダルマの戦いの象徴である！　我々はダルマの下に一つにまとまらなければならない！」と檄を飛ばした。本来、ヒンドゥー教における「ダルマ」とは、「人々が

従うべき“社会的規範”という意味合いを強くもつもの」だが、この演説の中では、「ジハード」に対抗するものとされ、ヒンドゥー教徒を戦いに狩り出す手段に悪用されてしまっている。

このようなインドにおけるイスラム教徒の苦境を前にして、9／03、国際テロ組織アルカイダ指導者のザワヒリ氏は、インターネットに投稿された55分間のビデオ声明で同組織のインド支部「インド亜大陸のアルカイダ」を創設したと表明した。その中でザワヒリ氏は、インド国内やミャンマー、バングラデシュなどに住むイスラム教徒を「不正と抑圧から助け出す」と明言し、インド亜大陸で「ジハード（聖戦）の旗を掲げる」と強調している。

アルカイダはパキスタンとアフガニスタンの国境地帯を拠点とするが、2011年の米軍事作戦で指導者ビンラディン容疑者が殺害されてから衰退している。分派したスンニ派の過激組織「イスラム国」がシリアやイラクで勢力を拡大する中、薄れつつある「権威」を取り戻し、新たなメンバー獲得につなげたいとの思惑があるとみられる。一方、イスラム国家樹立を目的とするアルカイダの思想は、カシミール地方の分離を目指してインド国内で活動する他のイスラム過激派と相いれないとテロ問題専門家は分析し、アルカイダがインド国内で確固たる拠点を確立し、勢力を伸ばすことは難しいと予想している。

これに対してインド新政権は、国際テロ組織アルカイダによる新たなテロ攻撃に警戒を強めている。政府当局は「アルカイダが存在感を示すために、大規模テロを計画している可能性がある」と指摘。攻撃対象となり得る12州に対し、港湾や軍事、外交、宗教関連施設の警備を強化するよう命じた。治安当局は州政府への通達で「ザワヒリ容疑者自身が支部創設を表明したことが、アルカイダにとってのインド支部の重要性を示唆している」と指摘。アフガンやパキスタンでアルカイダの活動にインド人が参加していると認め、近く国内でテロ攻撃を実行する恐れがあると警告した。

## 2. ジャマティ・イスラミの勢力回復

バングラデシュでは人口の83％がイスラム教徒、16％がヒンドゥー教徒、残りの1％が仏教徒、キリスト教徒である。したがってイスラム教徒が国を牛耳っていると言っても過言ではない。しかしながら、そのイスラム教の内部には、42年前のパキスタンからの独立時の因縁により、いまだに深刻な対立が続いている。当時、バングラデシュは9か月間にわたる独立戦争で約300万人もの同朋を失ったという。その独立戦争に際し、「イスラム共和国としての一体性」を主張し、バングラデシュのパキスタンからの独立に反対し、パキスタン軍に加担して戦ったのが、ジャマティ・イスラミというグループだった。彼らは独立派のイスラム教徒を「ヒンドゥー教徒の回し者」と呼び、パキスタン軍の力を借り、徹底して攻撃し、多くのイスラム同朋を殺害した。またパキスタン軍兵士の乱暴狼藉を看過した。初めは戦いを有利に進めたジャマティ・イスラミも、インド軍が介入するに及んで敗退し賊軍となり、バングラデシュの表舞台からは姿を消すことになった。それでもバングラデシュ独立後、このジャマティ・イスラミは一時期非合法化されたが、しぶとくその勢力を温存し続けた。

2013年12月、ジャマティ・イスラミに所属するアブドゥル・カデル・モッラが絞首刑に処せられた。その罪名は、「1971年、パキスタンからの独立戦争の最中、ダッカ市内で大量殺人および集団レイプを行った」というものである。つまりモッラは40年以上前の戦争犯罪により裁かれたのである。わざわざ40年前の戦争犯罪を暴き出し、死刑を執行したのには、政権与党であるアワミ連盟の側に大きな理由がある。アワミ連盟は2009年の選挙時に、「独立戦争当時の戦争犯罪人の処罰を行う」という公約を掲げ、バングラデシュ人の愛国心に訴え勝利した。2014年1月の総選挙を控えたアワミ連盟はその公約を果たす必要に迫られ、それを実行したというわけである。

当然のことながらジャマティ・イスラミは、2013年初めからモッラの裁判を遅らすため、全国的なハルタル実施を行っていた。野党第1党のバングラデシュ国民主義党（BNP）が行うハルタルは、ヒマをもてあましている若者たちが金銭で雇われ、適当に騒ぐ程度のものだが、ジャマティ・イスラミの行うハルタルは、死を恐れない若者たちが暴れ狂うものであり、実際に治安部隊との衝突の結果、2013年中に100人以上の死者を出した。このハルタルの激しさは、私自身も目の当たりにしている（既報）。このハルタルへの恐怖が、私をミャンマー工場建設への決断をさせたのである。

2012年9月、バングラデシュ南部、ミャンマー国境沿いにあるラム市で、イスラム過激派による仏教寺院および仏教徒の大規模な襲撃、略奪、破壊が行われた。私は20日後に、この現場に入り詳しく取材し、その惨状をただちに発信した。おそらく現場検証をしてこれを報道したのは、私だけであろう。このとき私は、ソフト・イスラムの国と信じていたバングラデシュに、過激派が存在しているということを知り、驚いた。しかもイスラム過激派から仏教徒を守ったというソフト・イスラム教徒を取材中に、突然、そのイスラム教徒の表情が変わり、話を止め、どこかに姿を隠してしまったことがあった。彼は10分ほどして再び姿を現し取材の続きに応じてくれたので、中断の理由を尋ねたところ、「イスラム過激派の若者が現れたので、身の危険を感じ、隠れた」と話してくれた。そのとき私は、そのことを深く詮索しなかったが、おそらくその過激派の若者とはジャマティ・イスラミだったのだろう。

ジャマティ・イスラミは豊富な資金を背景に、バングラデシュ全土にあるモスクに強い影響力を持っている。また農村地域に存在しているマドラサと呼ばれるイスラム教の宗教学校にも、その影響を広め、農村の優秀な学生に奨学金を出し大学に通わせる活動なども積極的に行っている。これらの結果、現在、ジャマティ・イスラミは、今回の選挙が正常に

行われていれば、約10％の議席を確保すると予測されていた。アワミ連盟と BNP の勢力はほぼ拮抗していると見られている中、ジャマティ・イスラミが BNP と組めば、BNP が政権与党となり、アワミ連盟が下野することになるのは、ほぼ確実であった。アワミ連盟はその事態を避けるため、2014年1月、BNP やジャマティ・イスラミが総選挙ボイコットを表明したのを逆用して、野党不在のまま単独で総選挙を強行し、圧勝した。

その後、あれほど荒れ狂ったハルタルもほぼ収束し、バングラデシュに平穏な空気が戻った。国会はアワミ連盟の一党独裁状態となったが、総選挙をやり直せという声もさほど大きくはない。しかも不思議なことに、BNP は選挙後、「全国規模のハルタルを今後封印する」と宣言した。しかしジャマティ・イスラミは引き続きハルタルを行う姿勢を崩していない。このような状況下で、インドにアルカイダ支部が設立されたのである。現政権のアワミ連盟は、このジャマティ・イスラミとインドのアルカイダが合流することを強く警戒している。

### 3. 仏教徒過激派（969運動）の台頭とイスラム教徒への襲撃

ミャンマーでは人口の90％が上座部仏教徒、4％がキリスト教徒、4％がイスラム教徒、その他が2％となっており、ミャンマーは国際社会から敬虔な仏教徒の国として認知されている。上座部仏教の高僧たちは、基本的には政治に口を挟まず、仏教徒信者からお布施を受けながら、信者の救済のために、日夜、修行に励んでいる。しかしながら、その仏教徒信者たちが軍関係者に弾圧された場合などには、それに対する抗議行動の先頭に立つこともある。それでも高僧たちのほとんどは穏健な行動を旨としている。一方、イスラム教徒は古来、バングラデシュ国境沿いのラカイン州に、バングラデシュやインドから移り住んでいる。またイギリスの植民地時代には、ベンガル人イスラム教徒らがインドから植民地政策の一環として移民させられてきており、彼らはラカイン州だけでなくミャンマー全国に居住している。なおラカイン州の周辺に住みついたベンガル人イスラム教徒は、ロヒンギャと呼ばれた。その数は70～100万人と推定されている。

第2次大戦中に、日本軍の進軍によって英国軍が撤退すると、ラカイン州にビルマ人仏教徒が回帰し、ロヒンギャの追放を開始した。しかし日本軍の敗退とともに、ラカイン州には仏教徒とイスラム教徒が混在することになった。1988年、当時の軍事政権は、ロヒンギャがスー・チー氏の民主化運動を支持したため、強烈な弾圧に踏み切った。たまりかねたロヒンギャ約30万人がバングラデシュに逃げ込んだ。その一部は現在も、国境沿いの難民キャンプに暮らしている。その後、数度にわたりロヒンギャは難民として、バングラデシュに亡命しようとしたが、バングラデシュ側がこれを拒んだため、ミャンマーに送り返された。ミャンマー側もそれを受け入れず、ロヒンギャの中には第3国を求めて海上を彷徨い、海賊に襲われたり、遭難したりするものも少なくなかった。

それでもロヒンギャや全国に散らばったイスラム教徒は、仏教徒と静かに共存していた。ところが2012年秋から2013年末にかけて、仏教徒のイスラム教徒襲撃事件が数多く発生した。いずれも小さないさかいに端を発し、仏教徒のイスラム教徒への大規模な襲撃、略奪、破壊に及んでいる。ことに2013年3月の終わり、メティラ県では仏教徒の暴徒がイスラム教徒の住居、店舗、モスクを襲撃し、40名ほどを殺害した。そのおりにイスラム教徒の店舗の残骸には「969」という数字がスプレーで書かれていた。「969」という数字は仏教における三宝を意味し、この騒動により、「969運動」という過激派仏教徒集団の存在がにわかにクローズアップされることになった。

2013年夏、私はヤンゴン北方の地で、工場適地を探していた。そのおりに、偶然、仏教徒によるイスラム教徒襲撃現場に出くわした。それはすさまじいもので、イスラム教徒の店舗やモスク、車輌が焼き払われ、遠くからも黒煙を目にすることができた。道路が警察により封鎖されてしまったので、数時間、その場での待機を余儀なくされた。その地の仏教徒住民たちは、「昨日まで、この地のイスラム教徒と仏教徒は仲良くしていたのに、突然、こんなことになってしまった」と驚いていた。仏教徒の襲撃後、イスラム教徒たちはすぐにその場から逃げだし、警察に保護されたという話だった。

この数年、ミャンマーの各地で起きているイスラム教徒襲撃事件は、過激派仏教徒の「969運動」が扇動していると推測される。「969運動」を率いているのは、マンダレーを拠点として活動する高僧アシン・ウィラトゥ氏である。アシン・ウィラトゥ氏は、急速に大きくなる「969運動」の急先鋒に立って多数のスピーチを行い、仏教徒に対し、「969」を掲げる店だけで買い、イスラム教徒の店をボイコットするように呼びかけたりしている。なぜ、「969運動」急速に勢力を拡大しているのかは、今のところ定かではないが、政府内の反民主化グループが、スー・チー氏の信用を失墜させようとして、画策しているのではないかという見方もある。それは、「反民主化グループは、ロヒンギャに肯定的な発言をせざるを得ない立場にスー・チー氏を追い込みたいのである。そうすれば、反イスラム感情を抱いている者が多いミャンマーの仏教徒の間で人気が高い彼女を貶められる。多くのビルマ人が仏教を保護するという名目のもと、暴力を認めているように見える。一方で、彼女がこの問題について沈黙を守れば、人権に対して毅然とした立場を取る彼女を支援する人々を失望させることになる」というものである。これに対して、スー・チー氏は現時点では態度を留保している。

このような状況下で、インドにアルカイダの支部が設立されたのである。アルカイダは弾圧されているロヒンギャに手を差しのべることも行動範囲に入れている。現在、ミャンマー政府は自国内のイスラム教徒が少数勢力であるからといって、それを侮っておらず、同時多発テロも想定して、警戒を強めているという。

## 4.「何をなすべきか」

バングラデシュ、インド、ミャンマーの地政学的関係はきわめて複雑である。右の地図を見れば一目瞭然だが、バングラデシュとミャンマーの間には、セブンシスターズと呼ばれるインドの7州が存在している。この7州はインドの中でも極貧とされている地域であり、中島岳志氏はその著書「ヒンドゥー・ナショナリズム」（中公新書刊）の中で、「マニプールという場所は、第2次大戦中に日本軍が進撃し、歴史的な大敗を喫したあのインパールである。このミャンマーとの国境に近い地域に住む少数民族の人の中には、イギリスの植民地時代にキリスト教徒に改宗した人が多く、現在 RSS が重点的にヒンドゥーへの改修活動を進めている地域である。また、ナガランドなどを含めたこの地域一帯は、インド独立以降、さまざまな形で分離独立運動が行われてきた場所であり、RSS にとっては、ネイションの統合のためにも何とかしてヒンドゥー文化への取り込みを進めたい地域なのである」と書いている。またセブンシスターズには、土着の民間信仰も色濃く残っており、チン族などの武装組織も活動中である。さらに上述したように、バングラデシュのチッタゴン以東には、かつて日本軍と共に進出した仏教徒が居住しており、イスラム過激派のターゲットになっている。ミャンマーのシットウェー近辺には、英国軍と共に進出したイスラム教徒（ロヒンギャ）が居住しており、仏教徒過激派のターゲットになっている。そのような両国に、今回、アルカイダが触手を伸ばしてきたのである。

私には、イスラム教や仏教の教理や行動原理の是非を論じる力はない。しかしながら、暴力を振るってまで自らの勢力拡大を図ろうとする行為には、それがどんな宗教であろうとも絶対反対である。たとえどんなことがあっても、テロ行為はやめさせなければならないし、ハルタルという名の破壊行為を許すこともできない。また他宗教への襲撃、略奪、破壊などの行為も絶対に行わせてはならない。

人民大衆が過激な行動に走るのには、生活水準の低さが大きな理由としてあげられる。インド、バングラデシュ、ミャンマーは共に、世界の最貧国に近い。これらの国の生活水準を引き上げ、貧困を撲滅することが、彼らが過激な行動に走るのを阻止するもっとも有効な手段である。その意味で、日本政府が、インド、バングラデシュ、ミャンマーへ、それぞれ多額の援助を行うことを表明したことは、大きな意義がある。今後はその援助が、人民大衆の手に渡り、本当に貧困の撲滅に直結するかどうかを見定めなければならないが。

わが社は現在、バングラデシュのダッカとミャンマーのピーで縫製工場を稼働させている。数年後には、セブンシスターズにも工場を建設したいと考えている。私は、わが社同様に、先進諸国の労働集約型産業が、これらの国に大挙して進出し、一気に生活水準を引き上げることが貧困撲滅のもっとも近道であり、それこそがアルカイダの進出を食い止める切り札だと考える。もちろん悪しき資本主義を持ち込み、貧富の格差を拡大するようなことは避けなければならないが。

以上